

市道古志大野線道路改良事業に伴う発掘調査報告書2

二 部 遺 跡

平成27(2015)年8月

島根県松江市教育委員会
公益財団法人松江市スポーツ振興財団

例　　言

1. 本書は、平成25年度に委託を受けた、市道古志大野線道路改良事業に伴う二部遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、松江市から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

名 称 二部遺跡
所在 地 島根県松江市古曾志町352番2外

4. 現地調査の期間

平成25年4月19日～平成25年6月14日

5. 開発面積及び調査面積

開発面積 12,000m² (延長2,150m)
調査面積 257.0m²

6. 各年度の調査組織

〔平成25年度〕現地調査

依頼者 松江市土木課

主体者 松江市教育委員会

事務局 松江市教育委員会

教育長 福島 律子(～5月20日)

清水 伸夫(5月21日～)

〃 文化財課 課長 錦織 慶樹

〃 〃 調査係 係長 赤澤 秀則

〃 〃 専門企画員 穴道 元

〃 〃 副主任 德永 隆

調査指導 島根県教育庁 文化財課 企画幹角田 徳幸

島根県古代出雲歴史博物館 交流普及課 課長 柳浦 俊一

島根県古代文化センター 研究員 稲田 陽介

島根県立三瓶自然館サヒメル 企画情報課 主幹 中村 唯史

実施者 公益財団法人松江市スポーツ振興財団 理事長 福島 律子(～5月31日)

清水 伸夫(6月1日～)

埋蔵文化財課 課長 三島 秀幸

〃 調査係 係長 古藤 博昭

〃 〃 調査員 廣瀬 貴子(担当者)

〃 〃 調査補助員 門脇 祐介

[平成27年度] 報告書作成業務

依頼者 松江市

主 体 者 松江市教育委員会

教 育 長 清水 伸夫

事 務 局 松江市歴史まちづくり部

部 長 安田 憲司

〃 まちづくり文化財課

課 長 永島 真吾

〃 〃 専門幹（埋蔵文化財調査室長兼務）

飯塚 康行

〃 〃 埋蔵文化財調査室 調査係 係 長 赤澤 秀則

〃 〃 〃 〃 主 任 徳永 隆

〃 〃 〃 〃嘱 託 門脇 誠也

遺物指導 島根県教育庁埋蔵文化財課調査センター

企 画 幹 柳浦 俊一

実 施 者 公益財團法人松江市スポーツ振興財団

理 事 長 清水 伸夫

埋蔵文化財課 課 長 曾田 健

〃 調査係 係 長 川西 学

〃 〃 調 査 員 廣瀬 貴子（担当者）

〃 〃 調査補助員 門脇 祐介

7. 調査に携わった発掘作業員

岩成博美、大西将禎、加藤恵治、福田紘治、船越律

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

小原明美、金坂昇、坂本玲子、角優佳、須藤佳奈子、千代田絵美、松本祥子

9. 本書の執筆は第1章を徳永が、第2～5章を廣瀬が執筆した。また、編集は松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て廣瀬が行った。

10. 本書における土器区分、分類、編年は以下を参照した。

〔縄文土器〕

幡中光輔 2012 「山陰地域の縄文時代中期末土器考—中期末から後期初頭への系譜的検討—」

『島根考古学会誌』第29集 島根考古学会

濱田竜彦 2005 「山陰地方における縄文時代晩期土器について—鳥取県、島根県東部を中心に—」

『第16回 中四国縄文研究会 縄文時代晩期の山陰地方』 中四国縄文研究会

柳浦俊一 2003 「山陰中部域における縄文時代後期土器の地域性—とくに「中津式」の小地域

性について—」『立命館大学考古学論集Ⅲ』 立命館大学考古学論集刊行会

柳浦俊一 2010 「各地域の土器編年 4. 山陰」『西日本の縄文土器 後期』 真陽社

柳浦俊一 2000 「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年—中津・福田K2式土器群、縁

帶文土器群の地域編年—」『島根考古学会誌』第17集 島根考古学会

柳浦俊一 1994 「島根県の縄文時代後期中葉～晩期土器の概要—飯石郡頓原町森遺跡出土土

器を中心とした—」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

[弥生土器]

赤澤秀則 1992 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」 鹿島町教育委員会

松本岩雄 1992 「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』 木耳社

[土師器]

松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会

[須恵器]

稻田陽介 2013 「史跡出雲国府跡－9 総括編－」『第10章 出土遺物の様相 第2節 土器
1.須恵器・土師器 3) 出雲国府跡出土土器の型式設定と実年代』 島根県教育委員会

11. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修：財團法人日本色彩研究所 色票監修に従って表記した。

12. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。

また、レベルは海拔標高を示す。

13. 本書における遺構記号は以下のとおりである。

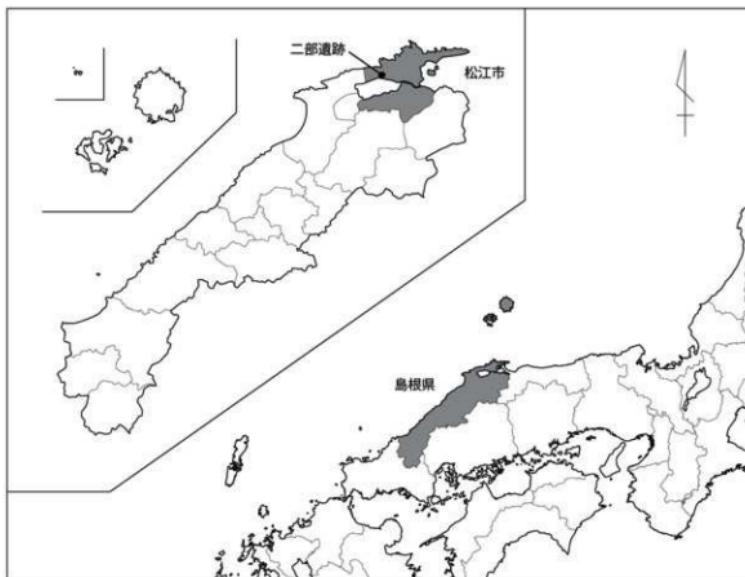
S K : 土坑 S D : 溝 N R : 自然流路

14. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は松江市教育委員会で保管している。

15. 本書の遺構番号は調査時に設定したものを報告書作成にあたり、種別の番号に振り直した。遺構名の新旧は下記のとおりである。尚、遺物の注記は旧番号で実施した。

遺構名(新)	遺構名(旧)
SK01	SK03
SK02	SK01
SK03	SK02
SK04	SK04
SD01	SD02
SD02	SD01
NR01	—

16. 島根県・松江市位置図



本文目次

例言

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 位置と歴史的環境 2

第3章 調査の方法 5

第4章 調査の成果

第1節 調査の概要 7

第2節 基本層序 7

第3節 遺構と遺物 10

第5章 総括 24

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	二部遺跡位置図	1
第2図	周辺の遺跡分布図	4
第3図	調査範囲と開発範囲図	5
第4図	試掘調査出土遺物実測図	6
第5図	調査グリッド配置図	6
第6図	調査区南壁土層断面図	8
第7図	10層出土遺物実測図	10
第8図	第1遺構面全体図	11
第9図	SK01平面・土層断面図	12
第10図	SK01出土遺物実測図	13
第11図	SK02平面・土層断面図	13
第12図	SK03平面・土層断面図	13
第13図	SK04平面・土層断面図	14
第14図	SK04出土遺物実測図	15
第15図	SD01平面・土層断面図	15
第16図	SD02平面・土層断面図	16
第17図	46・47層出土遺物実測図	17
第18図	第2遺構面全体図	18
第19図	NR01平面・土層断面図	19
第20図	NR01上層（48層）出土遺物実測図	19
第21図	NR01中層（50層）出土遺物実測図①	21
第22図	NR01中層（50層）出土遺物実測図②	22
第23図	NR01下層（51層）出土遺物実測図	23
第24図	二部遺跡遺構変遷図	25

挿表目次

表1	二部遺跡・NR01出土黒曜石・サヌカイト・碧玉計測表	26
----	----------------------------	----

図版目次

図版1	調査前全景（南東から）、調査区西側南壁土層断面（北西から） 調査区東側（東端部）南壁土層断面（北西から）
図版2	調査区西側完掘状況（南東から）、調査区東側完掘状況（北西から）
図版3	調査区東側完掘状況（南東から）、SK01遺物出土状況（北西から）
図版4	SK01（北西から）、SK02（南西から）、SK03（北西から）
図版5	SK04（北東から）、SD01（南西から）、SD02土層断面（北東から）
図版6	SD02（北西から）、遺物包含層（46層）出土遺物、遺物包含層（47層）出土遺物
図版7	NR01遺物出土状況（土器）、NR01遺物出土状況（石製品）、NR01（北西から）
図版8	試掘調査出土遺物、10層出土遺物、SK01出土遺物
図版9	SK04出土遺物、46・47層出土遺物、NR01上層（48層）出土遺物
図版10	NR01中層（50層）出土遺物
図版11	NR01下層（51層）出土遺物

第1章 調査に至る経緯

市道古志大野線は、宍道湖北岸を走る国道431号線北側の住宅街に位置し、松江市と出雲市を東西に結ぶ主要路線となっている。しかし、この路線には歩道はあるものの、一部区間は1車線で幅員が狭く、特に朝夕の通勤時間帯には交通量が増加し、歩行者の安全性が保たれない状況となっていた。また沿線には小学校・幼稚園があり、通学路ともなっていることから早急な整備が望まれていた。このことから、総延長2.15kmの区間について、松江市により道路改良事業が計画されることとなったものである。

このことについて、開発部局から事業区域における埋蔵文化財の有無に関する協議を松江市教育委員会が受けこととなり、周知の遺跡は存在していなかったものの、未調査地であったことから平成18年9月に分布調査を行い、試掘調査を実施する箇所の選定を行うこととなった。

試掘調査は、松江市の用地買収が終了した場所から順次実施することとなったため、平成21年3月と11月に事業予定地東半の9地点（トレンチ14箇所）について実施した。このうち2地点で遺跡が確認され、それぞれ「米塚遺跡」、「西後遺跡」として周知されることとなり、平成22年8月に発掘調査を実施し、平成23年1月には報告書を刊行している。

次に、事業予定地西半の区域について平成24年12月～平成25年1月に4地点（トレンチ8箇所）で試掘調査を実施し、このうち1地点で本書で報告する「二部遺跡」が発見された。このことから、平成25年2月に発見通知（発掘通知を兼ねる）が提出され、これを受けた県教育委員会から当該遺跡にかかる道路拡幅範囲について発掘調査を実施するよう勧告があったことから、平成25年4月～6月にかけて現地での発掘調査を実施するに至ったものである。



第1図 二部遺跡位置図 (S=1:5,000)

第2章 位置と歴史的環境

1. 位置（第2図）

二部遺跡は松江市古曾志町352番2外、市道古志大野線の南側道路沿いに所在し、宍道湖北岸、松江市街地から約5km西に位置する。宍道湖北岸は、島根半島北山山系から派生する低丘陵といくつもの細長い谷から形成されている。本遺跡も北山山系朝日山から南東方向に派生する丘陵裾部、北側から延びる細い谷の出口付近に位置している。南側には古曾志の沖積平野が、また、その東側には浜佐陀の干拓された平野が広がり、穀倉地帯となっている。南側1.2kmには宍道湖が存在し、東側には近世に開削された佐陀川が流れ、北側の日本海に抜けるルートに接する海運の要衝地であった。

本遺跡地は以前水田であり、その後盛土を行い、現在は畑地となっている。

2. 歴史的環境（第2図）

本調査区周辺は縄文時代前期頃まで入江であったと考えられる⁽¹⁾。その後堆積が進み現況のようになり、位置的環境からみても生活環境に適した場所と考えられる。しかし、これまでに確認されている集落遺跡は少なく、国指定史跡の丹花庵古墳（2）や古曾志大谷古墳群（10）など多くの古墳が存在する。

旧石器時代の遺構は現段階で確認されていないが、古曾志平廻田遺跡（11）からナイフ形石器（後期）が、古曾志清水遺跡（8）から玉髓質メノウ製の台形様石器（後期）が出土している。古曾志清水遺跡から出土したナイフ形石器は、横長剣片に加工を施したもので、瀬戸内地方特有の技法がみられ、他地域との交流を窺わせる資料である。

縄文時代の遺跡は少なく、縄文土器が採集された後谷遺跡（15）や宍道湖湖底遺跡（25）、竪穴式建物跡が検出され、小形石匙等が出土した古曾志善坊遺跡（12）が存在する。

弥生時代の遺跡はあまり知られていないが、古曾志清水遺跡において加工段や柱穴、土坑が検出され、弥生土器が出土している。また、本遺跡北東側に位置するスモト遺跡（35）や西後遺跡（28）から弥生時代後期の遺物が出土し、当地域における弥生時代の遺跡の存在を窺わせる。

古墳時代になると低丘陵に古墳が築かれるようになる。前期古墳としては釜代古墳群（16）や北小原古墳群（18）が存在する。釜代1号墳の主体部からは内行花文鏡が、北小原3号墳からは珠文鏡が出土している。中期に入ると大型古墳が盛んに造られるようになり、出雲でも有数の方墳である丹花庵古墳が本遺跡南に存在する。一辺47m、高さ3.5m、二段築成の方墳であり、葺石や埴輪を有する。主体部に長持形石棺を埋置し、その蓋石には斜格子文の装飾がみられる。本遺跡から西側、宍道湖を眺望する低丘陵には古曾志大谷古墳群が存在する。なかでも1号墳は全長45.7mの前方後方墳で、墳丘に葺石や埴輪を廻らしている。他に直径47m、二段築成で葺石、埴輪が認められる古曾志大塚1号墳が存在する。古曾志大塚古墳群（23）、割竹形石棺や革綴短甲片が出土した大塚荒神古墳（5）、ちょう塚古墳群（32）など多くの古墳が築成され、当地域の強大な勢力を想定させる。後期になると大形の古墳は築かれなくなり、比較的小形の古墳や横穴墓が造られる。古墳としては神主塚古墳（22）や

寺津古墳群（24）が知られる程度である。横穴墓は宍道湖に近い低丘陵に多く、北小原横穴群（19）、筆ノ尾横穴群（50）、寺津横穴群（20）、寺津停留所裏横穴群（21）などがみられる。北小原横穴は整正家形の玄室内に2基の家形石棺を並べ、玄門を「**フ**」の浮き彫りのある板石で閉塞している。

奈良、平安時代の調査例は少ない。奈良時代の遺跡として注目されるのは、西長江町の常楽寺瓦窯跡（44）である。他に須恵器窯跡として古曾志平廻田遺跡で確認された3基の窯跡がある。壺や皿など多くの遺物が出土し、10世紀代前後のものと考えられている。集落跡としてはスモト遺跡で8世紀代後半から9世紀代初めの掘立柱建物跡や柱穴列が、古曾志平廻田遺跡から奈良時代の建物跡が検出されている。古墳時代以降の散布地には古曾志幸神遺跡（4）、広垣遺跡（46）などがある。本遺跡から北西側の西長江町には、かつて西長江地区条里制遺跡（48）が存在していたが、現在は消滅している。

中世の遺跡としては、道榮寺遺跡（3）や聖塚（29）、米塚遺跡（27）や多くの山城がある。道榮寺遺跡からは五輪塔と宝篋印塔が、米塚遺跡の古墓からは火輪と経石が出土している。また、周辺丘陵には山城が多く、秋鹿鷹尾城の出城であった西長江要害山城跡（55）や雑賀入道ヨシモトの居城と伝えられる二つ山城跡（57）、満願寺城跡（26）などがある。満願寺城は宍道湖と佐太水海の間に突き出した丘陵の先端に位置し、尼子氏に仕えた湯原信綱が築城した城である。戦国時代には毛利元就の陣所にもなったと伝えられ、重要な拠点であったと考えられる。

註

- (1) 島根県三瓶自然館サヒメル 企画情報課 主幹 中村唯史氏のご教示による。
(中村唯史 2014 「6. 縄文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集 第13集 島根県古代文化センター を参照)

【参考文献】

- 奥原福市 1926 「町村誌」「八束郡誌」
- 島根県 1925 「丹花庵古墳」「島根県史蹟名勝天然記念物調査報告」第二回
- 島根県教育委員会 1989 「古曾志遺跡群発掘調査報告書」
- 島根県教育委員会 1998 「島根県中近世城館調査報告書<第2集>出雲・隠岐の城館」
- 古江まちづくり推進委員会 1990 「ふるさと古江」
- 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 1994 第1集『釜代1号墳外発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 1995 第57集『筆ノ尾横穴群発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2000 第85集『北小原古墳群発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2011 第136集『米塚遺跡・西後遺跡』
- 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2011 第144集『スモト遺跡』



- | | | |
|----------------|----------------------|-----------------|
| 1. 二部遺跡 | 20. 寺津横穴群 | 39. 小丸山古墳 |
| 2. 丹花庵古墳 | 21. 寺津停留所裏横穴群 | 40. 帯差古墳 |
| 3. 道栄寺遺跡 | 22. 神主塚古墳 | 41. 牛切古墳 |
| 4. 古曾志幸神道跡 | 23. 古曾志大塚古墳群 | 42. 煙前遺跡 |
| 5. 大塚荒神古墳 | 24. 寺津古墳群 | 43. 山崎古墳 |
| 6. 古曾志姥ヶ谷古墳群 | 25. 穴道湖庭庄遺跡 | 44. 常楽寺瓦窯跡 |
| 7. 古曾志平畠田古墳群 | 26. 満願寺城跡 | 45. M9遺跡(原廻谷遺跡) |
| 8. 古曾志清水遺跡 | 27. 米塚遺跡 | 46. 広垣遺跡 |
| 9. 古曾志寺廻田古墳群 | 28. 西後遺跡 | 47. 東長江古墳群 |
| 10. 古曾志大谷古墳群 | 29. 聖塚 | 48. 西長江地区条里制跡 |
| 11. 古曾志平畠田遺跡 | 30. 西谷遺跡 | 49. 岩屋古墳 |
| 12. 古曾志善功遺跡 | 31. 中古志遺跡 | 50. 筆ノ尾横穴群 |
| 13. 細原尻古墳 | 32. ちよう塚古墳群 | 51. 西長江山崎古墳 |
| 14. M4古墳(後谷古墳) | 33. M27古墳(古曾志下組古墳) | 52. 下垣井戸の上古墳 |
| 15. 後谷遺跡 | 34. M28古墳群(古曾志奥組古墳群) | 53. 塚さん古墳 |
| 16. 爰代古墳群 | 35. スモト遺跡 | 54. 下垣古墳 |
| 17. 爰代横穴 | 36. 茶臼山古墳群 | 55. 西長江要害山城跡 |
| 18. 北小原古墳群 | 37. M53遺跡(西谷上組遺跡) | 56. 宗塙古墳 |
| 19. 北小原横穴群 | 38. 牛切谷古墳 | 57. 二つ山城跡 |

第2図 周辺の遺跡分布図 (S=1:30,000)

第3章 調査の方法

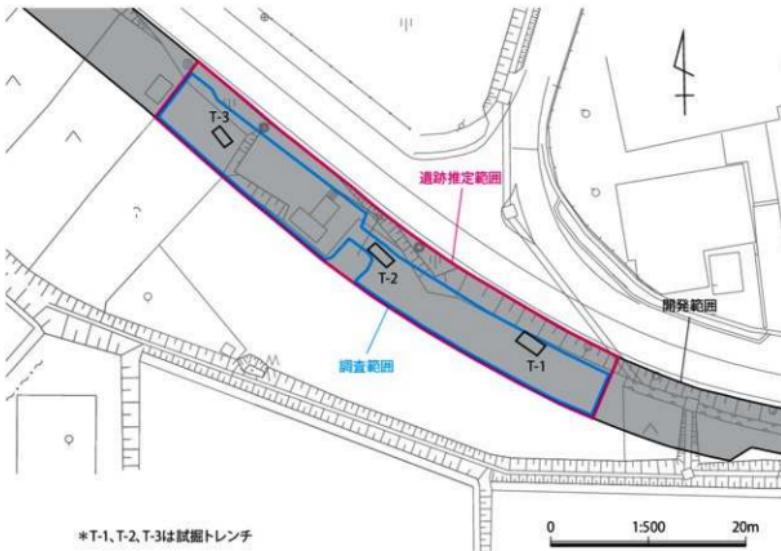
1. 調査範囲（第3図）

遺跡の範囲は開発範囲総面積12,000m²の内、421.8m²である。試掘調査の結果に伴い遺跡の範囲が確定され、調査範図については松江市教育委員会と協議を行い決定した。調査区は供用中の市道に隣接する東西に細長い調査区である。その道路法面にはコンクリート壁面があり、安全面を考慮して西側で1.4m、東側で2.7mの緩衝地帯を設けた。また、他にも様々な制約があり、調査区は東西52.3m、幅は東端で5.7m、西端で4.3m、調査面積は257.0m²である。

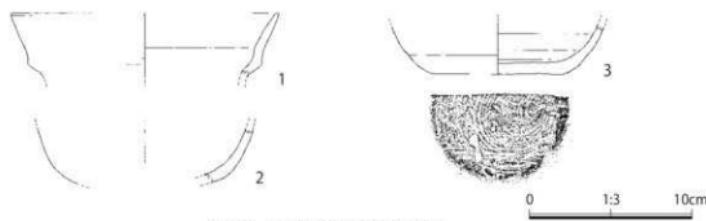
2. 試掘調査（第3・4図）

試掘調査では3本のトレーナー（T-1～3）調査を行った。遺構は確認されず、遺物包含層から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。遺物は破片のみで、また磨滅していることから図化できたものは少ない。出土土層については基本層序で後述する。

4-1はT-1から出土した複合口縁の甕である。口縁部はやや外反して立ち上がり、端部を丸くおさめている。全体に風化しており、調整は不明である。草田5～6期のものと思われる。4-2はT-2から出土した高環の坏部である。坏部が半球形で碗型を呈するもので古墳時代中期頃のものである。4-3はT-3から出土した須恵器の坏である。底部調整は回転糸切り後未調整で、体部の立ち上がりが緩やかである。出雲国府第3～5型式（8世紀第2四半期～第4四半期）のものと思われる。



第3図 調査範囲と開発範囲図 (S=1:500)



第4図 試掘調査出土遺物実測図

3. 調査の方法（第5図）

調査区を国土座標に当てはめ、 $X = -56955$ と $Y = 75300$ の交点を基点とし、北から南へA・B・C・・・東へ1・2・3・・・、と5mメッシュでグリッドを設定し、グリッド名はアルファベットの後にアラビア数字を組み合わせて呼称した。遺構に伴わない（主に遺物包含層）遺物はグリッド毎に取り上げた。

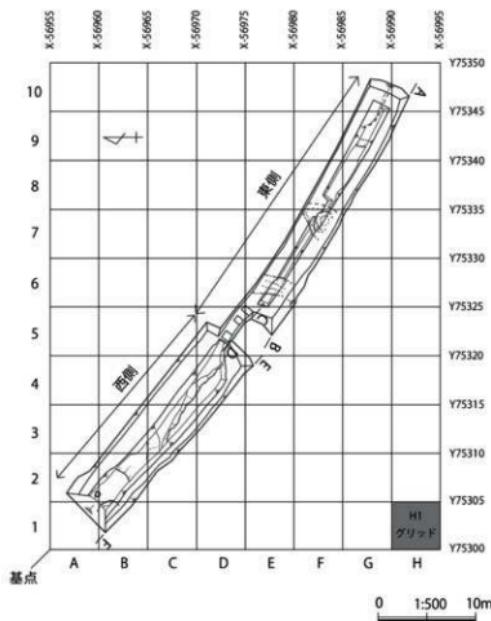
掘削は、最初に試掘調査で遺物包含層と確認された土層上面まで重機で行った。

調査は便宜上調査区中央より西側から始めた。遺物包含層の調査後、調査範囲の東西方向に地山確認のトレンチを入れると、地山は想定していたレベルより約1m低いところにあることがわかり、松江市文化財課と協議を行った結果

果、法面下端より約1m控え段掘りする方法で調査をすることとなった。西側の調査終了後指導会を実施し、安全面を考慮し埋め戻しを先に実施した。

次に調査区中央より東側の調査を行った。東側も西側と同じように遺物包含層の調査を行い、東西方向にトレンチを入れ地山の確認を行なうと西側と同じような状況であり、法面下側より約1m控え段掘りして調査をし、終了後、指導会を行い、直ちに埋め戻しを行つた。

上記のことから遺構の掘削範囲は限られ、また、調査区外へと統一していることから、全体像を確認できた遺構はない。



第5図 調査グリッド配置図 (S=1:500)

第4章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査区西側では、遺物包含層から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器が出土している。調査を進め掘り下げると、西端で土坑2基を検出し、さらに東西にトレンチを入れたことによって、地山面は西端から3分の1東側で南東方向に緩やかに下り、調査区中央付近で立ち上がる状況がみられた。これは北側から続く谷の一部と考えられ、自然流路<NR01>（第18図）として調査を行った。NR01堆積土から弥生土器、縄文土器、石製品が出土している。縄文土器は前期末から晚期、弥生土器は前期のもので、その大半が破片であったことから実測図化できなかった土器も多い。石製品は石鎌、石斧、石錐、磨石などが出土している。

東側も同様に遺物包含層の遺物採集、遺構検出を行い、土坑2基、溝2条を検出している。遺構は、堆積土層を基盤とし、地山面での遺構は確認していない。

第2節 基本層序（第6図）

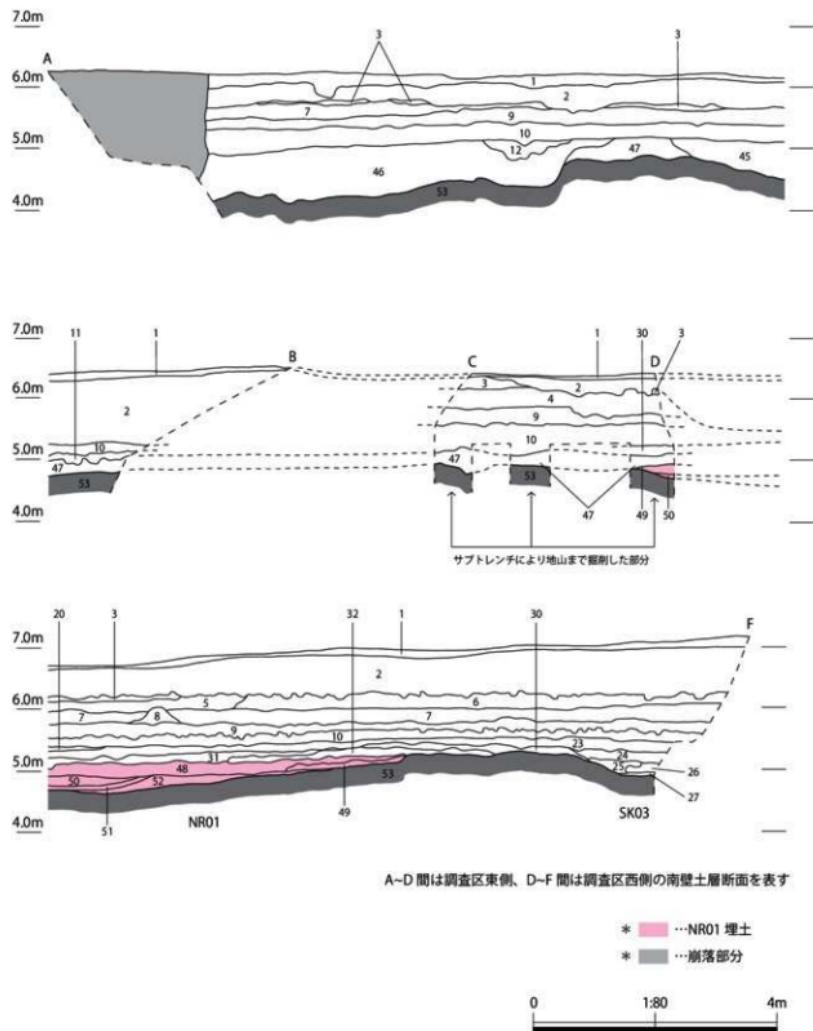
調査区内の現地表面標高は6.3～7.2mを測り、調査区西端から東端に向かって緩やかに下っている。現地表面下0.5～1.2mは表土及び造成土（1、2層）で、近現代の遺物を含んでいた。3～9層は畑以前の水田の耕作土や床土である。10層の灰色粘質土は試掘調査時の遺物包含層であり、重機掘削はこの土層上面まで行っている。この土層から弥生土器、土師器、須恵器が出土し、第3章で掲載した遺物（第4図1～3）もこの土層から出土している。第4図-3の時期（8世紀第2四半期から第4四半期）が一番新しく、同時期以降に堆積したものと考えられる。また、この土層は土質や土層上面が凸凹していることから水田の可能性が推測される。

11～52層は堆積土及び遺構埋土である。堆積土は調査区西側では水平堆積を成し、東側では45～47層のように凸凹し、浸食、堆積を繰り返していた様相が窺われる。遺構の基盤層はNR01以外堆積土で、SK01は18層を、SK02、03は30層を、SK04、SD01、02は46、47層を基盤としている。これらの土層のなかには薄く堆積した土層があり、土層断面から遺構面を確認したものもある。本来ならば遺構検出面毎に遺構面を設定し、掲載することが望ましいが、本報告では堆積土層を基盤とする遺構を第1遺構面の遺構として捉え、時期の新しいものから順に報告する。

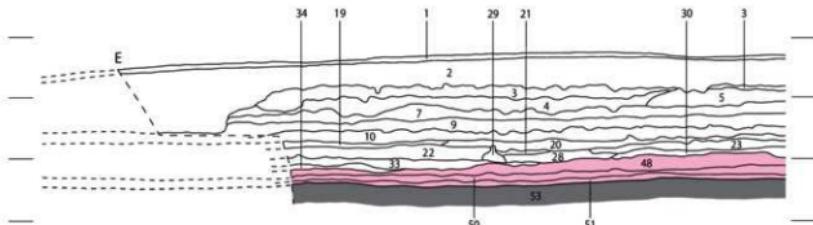
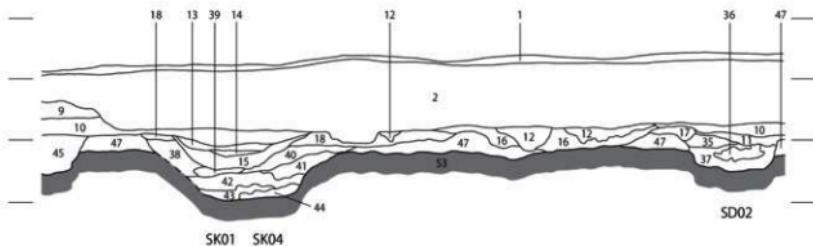
46、47層は東側地山面が浸食され、その後堆積した土層である。地山に酷似し、均質的で、人為的な感じのしない土層であるが、弥生時代終末期の土器を含んでいた。土器の器壁が薄い割に磨滅しておらず、また練まって出土していることから、近くに住居（集落）が存在し、土層と一緒に運ばれてきたものと考えられた。

第1節で述べたように、調査区西側でNR01を確認している。NR01は地山を基盤とし、48層～52層が堆積していた。地山を基盤とするNR01を第2遺構面とし、第3節、第4項で詳述する。

調査区は土層堆積状況から、堆積と浸食を繰り返した後水平堆積が進み、水田として利用されてきた状況が窺われる。



第6図 調査区南壁土層断面図



- | | |
|---|---|
| 1. 表土 | 28. 褐灰色砂礫層 (10YR6/1) |
| 2. 盛土 *近・現代の遺物を含む | 29. 灰色粘質土 (NS/) |
| 3. 灰色土 (NS/) | 30. 黄灰色土 (2.5YS/1) *やや磧を含む |
| 4. 灰色土 (10YS/1) | 31. 黄灰色土 (2.5YS/1) |
| 5. 灰色粘質土 (NS/) | 32. 灰色土 (NS/)*小磧を含む |
| 6. 灰色土 (NS/) | 33. 黄灰色粘質土 (2.5YS/1) |
| 7. 灰色土 (10YS/1) *近く締まった土 | 34. 灰色砂礫層 (5Y6/1) |
| 8. 褐灰色土 (10YR6/1) | 35. 褐灰色土 (10YR5/1)と明褐灰色土 (10YR7/6)の混合土 |
| 9. 褐灰色土 (10YR6/1) *炭化物が強い | 36. 灰色粘質土 (NA/)*腐食した木片を含む |
| 10. 灰色土 (N4/) | 37. 灰色土 (N4/) |
| 11. 褐灰色土 (10YR7/8) (10YR5/1) | 38. 黄灰色土 (10YR7/8)と黄灰色土 (2.5Y6/1)の混合土 |
| 12. にぶい黄褐色土 (10YR8/4) | 39. 灰色土 (5Y6/1) |
| 13. 褐灰色土 (10YR6/1) | 40. 黄褐色土 (10YR7/8) *黄褐色土 (2.5YS/1)がやや混じる |
| 14. 暗灰色土 (N3/) | 41. 黄灰色土 (2.5Y6/1)と黄褐色土 (10YR7/8)の混合土 |
| 15. 褐灰色土 (10YR5/1) 墓土 | 42. 灰色土 (NS/)*第42層より多い |
| 16. 浅黃褐色土 (10YR8/4) | 43. 灰色土 (5Y5/1)*第42層より多い |
| 17. 黄褐色土 (7.5YR7/8) | 44. 黄灰色土 (2.5Y6/1) |
| 18. 黄褐色土 (10YR8/6)と黄灰色土 (2.5YS/1)の混合土 | 45. 灰色土 (N6/)*と明褐灰色土 (10YR6/6)の混合土 |
| 19. 灰色粘質土 (NS/) | 46. 黄褐色土 (10YR7/8) |
| 20. 灰色土 (NS/)*明黄褐色砂礫層 (2.5Y7/6)の混合土 | 47. 黄褐色土 (10YR8/8) *黄褐色土 (2.5Y6/1)が混じる |
| 21. 灰色土 (NS/)*灰白色の磧をやや含む | 48. 褐灰色粘質土 (10YR5/1)*很多 |
| 22. 褐灰色土 (7.5YR5/1) | 49. 灰白色土 (10YR7/1) |
| 23. 黄褐色粘質土 (2.5YS/1) | 50. 灰色砂礫層 (7.5Y6/1) |
| 24. 褐灰色土 (10YR5/1) *黄灰色土 (2.5Y7/2)をやや含む | 51. 灰色砂礫層 (7.5Y6/1)と明オリーブ灰色粘質土 (2.5GY7/1)の混合土 |
| 25. 褐灰色土 (7.5YR6/1) | 52. 黄灰色砂礫層 (2.5Y6/1) |
| 26. 褐灰色粘質土 (7.5YR6/1) *表を含む | 53. 明オリーブ灰色土 (2.5GY7/1)*無遺物層 |
| 27. 褐灰色土 (7.5YR6/1)と明オリーブ灰色土 (5GY7/1)の混合土 | |
- SD02 墓土
- SK04 墓土
- NR01 墓土

第3節 遺構と遺物

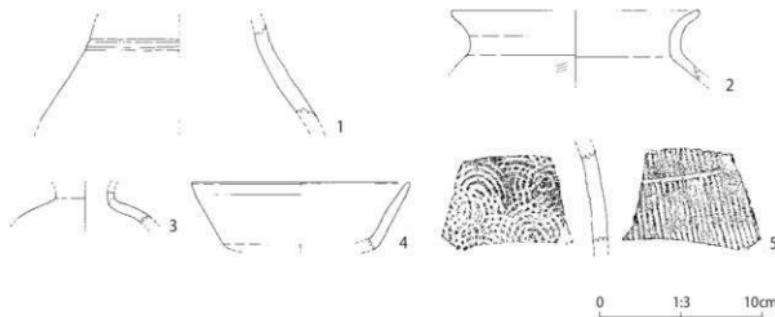
前節で説明したように、層序に従い、上から順に出土遺物と遺構について記述する。第1項で10層の出土遺物を、第2項で第1遺構面を、第3項で46層、47層出土遺物を、第4項で第2遺構面について報告する。

第1項 10層出土遺物（第7図）

第7図は10層出土遺物である。

7-1は弥生土器、広口壺の胴部上半である。外面に2条のヘラ描き直線文をめぐらし、調整は風化の為不明である。I-3様式のものと思われる。7-2は土師器である。単純口縁の甕で、古墳時代後期頃と考えられる。3～5は須恵器である。7-3は小壺の肩部、7-4は体部が逆「ハ」の字状に開く、出雲国府第5型式の环と思われる。7-5は甕片である。

10層は出土遺物から8世紀第4四半期以降に堆積したものと考えられる。

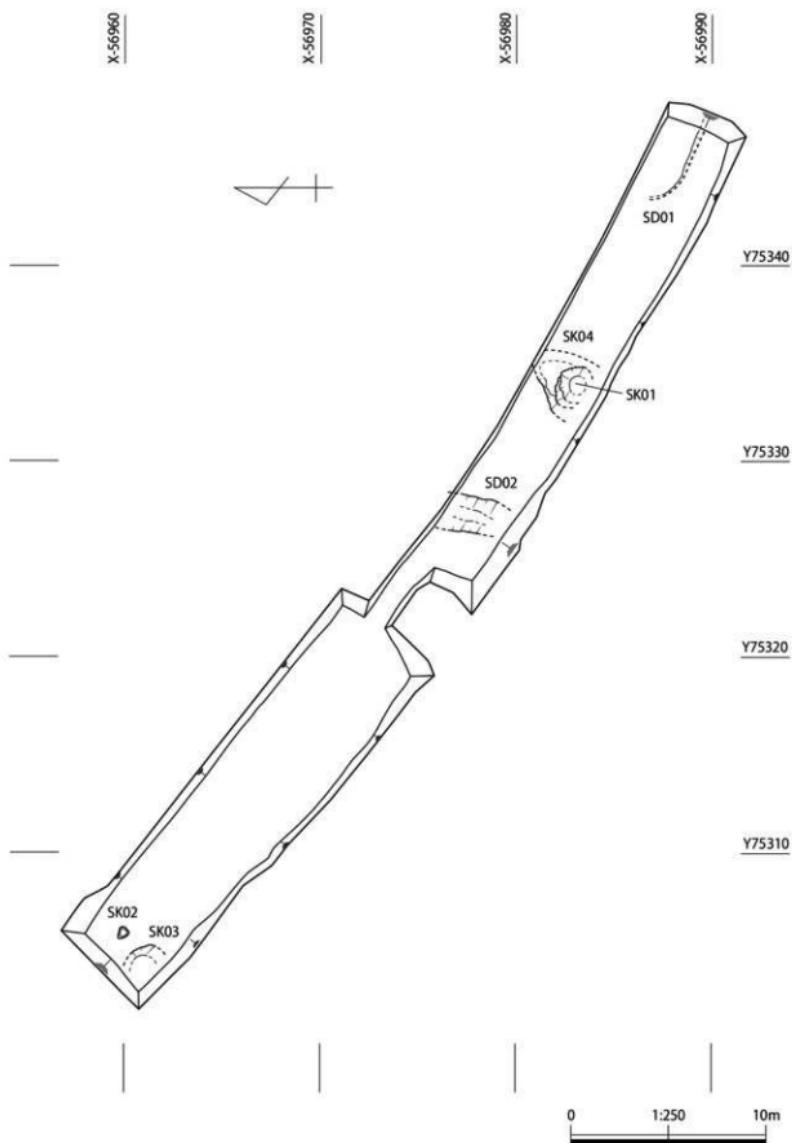


第7図 10層出土遺物実測図

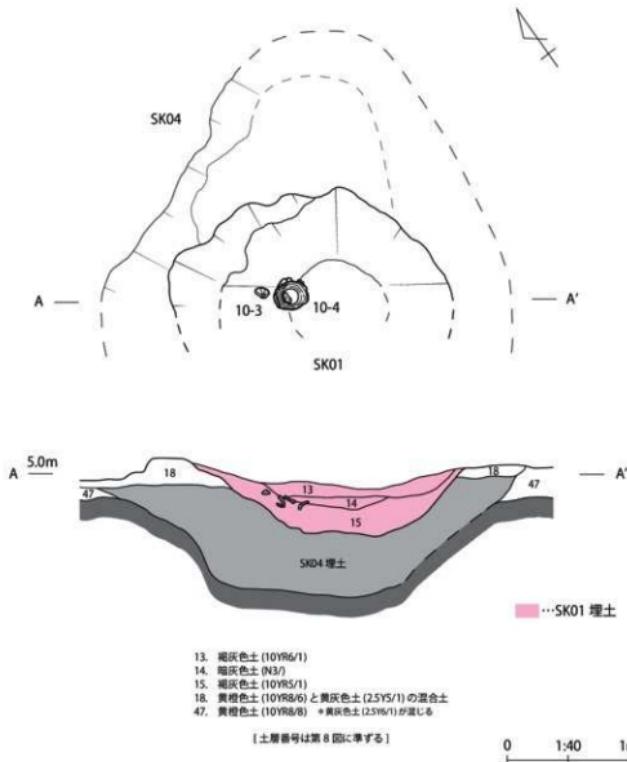
第2項 第1遺構面

SK01（第8・9・10図）

SK01は調査区東側中央付近、F7区に位置する土坑である。平面形はやや楕円形を呈し、南西側は調査区外へ続いている。現況で東西2.28m、南北0.9m、深さ0.58m、検出標高5.2mを測る。後述するSK04と重複関係にあり、検出状況、土層断面からSK01が新でSK04が古であったことがわかる。18層を基盤とし、埋土は灰色系の粘質土が堆積していた。遺物は、15層から弥生土器、土師器が出土している。

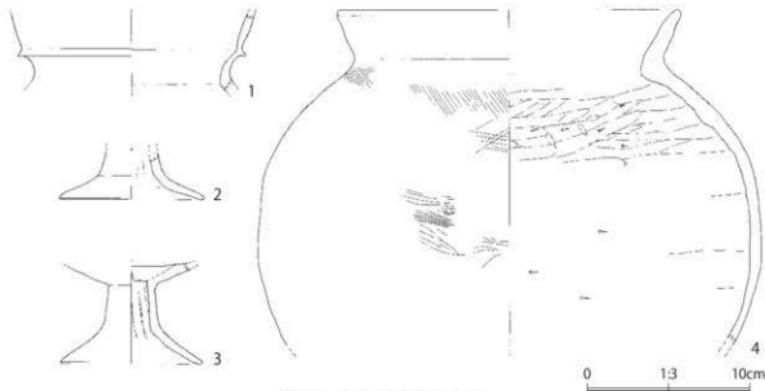


第8図 第1遺構面全体図



第9図 SK01平面・土層断面図

10-1は複合口縁の壺である。口縁部は直立に近い立ち上がりで、端部を欠く。下端突出部は断面三角形状を呈し水平に突出しており、草田5～6期頃に相当すると思われる。10-2、3は土師器の高环である。10-2は小型高环の脚部で、内外面は風化し、筒部内面に僅かに絞り痕がみられる。10-3は環部と脚部の接続部分に円盤を充填し、深さ6mm、直径5mmの刺突痕をもつものである。古墳時代前期のものと思われる。10-4は、口縁部が短く、複合口縁が退化したもので外面に稜が僅かにみられる壺である。器壁は厚く、外面にハケ目、内面に横方向のヘラ削りが施され、古墳時代中期頃に相当する。出土遺物の時期から古墳時代中期頃の土坑と捉える。



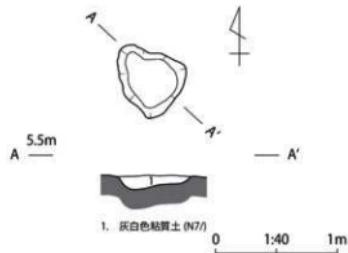
第10図 SK01出土遺物実測図

SK02(第8・11図)

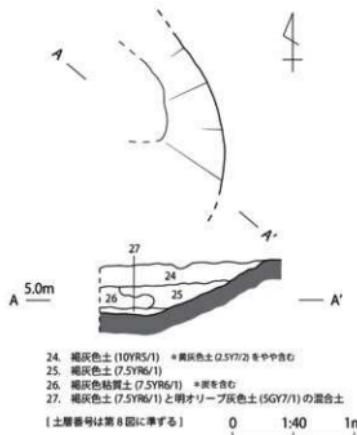
調査区西端(A2~B2区)で検出した土坑である。平面形はやや三角形を呈し、南北0.54m、東西0.56m、深さ5cmを測る。遺物は出土していないことから時期は不明であるが、南壁土層断面10層堆積以前の土坑である。

SK03(第8・12図)

調査区西端(B1区)に位置する。SK02と同じく南壁土層断面30層を基盤とする土坑である。現況で西南壁側1.3m、北西壁側0.8m、深さ0.4mを測り、東側調査区外へと続いている。遺物はなく、時期は不明であるが、南壁土層断面10層堆積以前の土坑である。



第11図 SK02平面・土層断面図

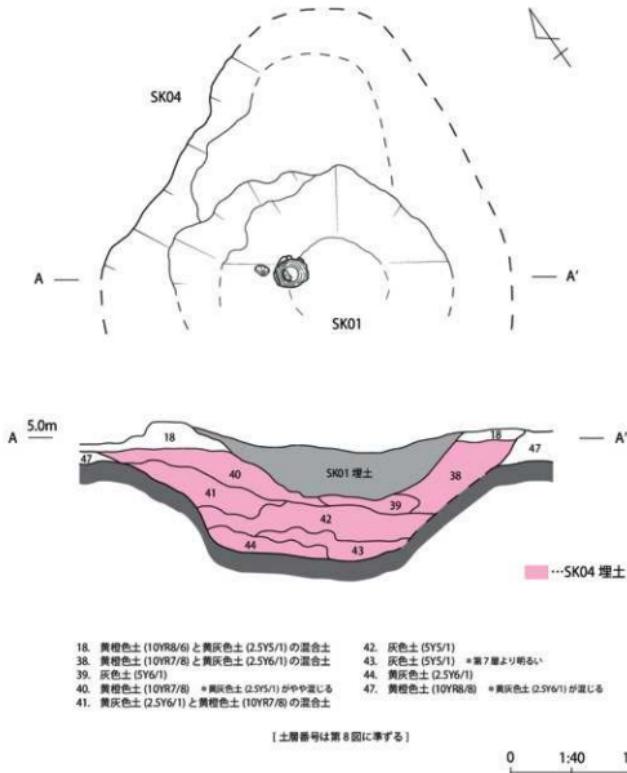


第12図 SK03平面・土層断面図

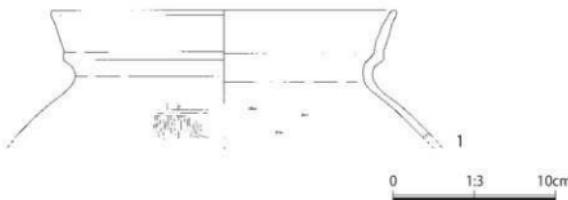
SK04（第8・13・14図）

SK04はF7区に位置し、SK01と重複する土坑である。様々な制約から掘削できた範囲は限られ、平面図は掘削できたところを実線で、検出状況、土層断面から想定される部分について破線で図化した。現況で検出標高4.85m、東西3.35m、南北2.25m、深さ0.85mを測り、南西側調査区外へ続いている。土坑埋土は灰色や黄灰色土で、40層、42層、44層から弥生土器が出土し、図化できたものを掲載した。

14-1は40層から出土した複合口縁の甕である。薄く引き出したような口縁部をもち、端部をわずかに外方に軽く折り曲げている。草田5～6期のものと思われる。



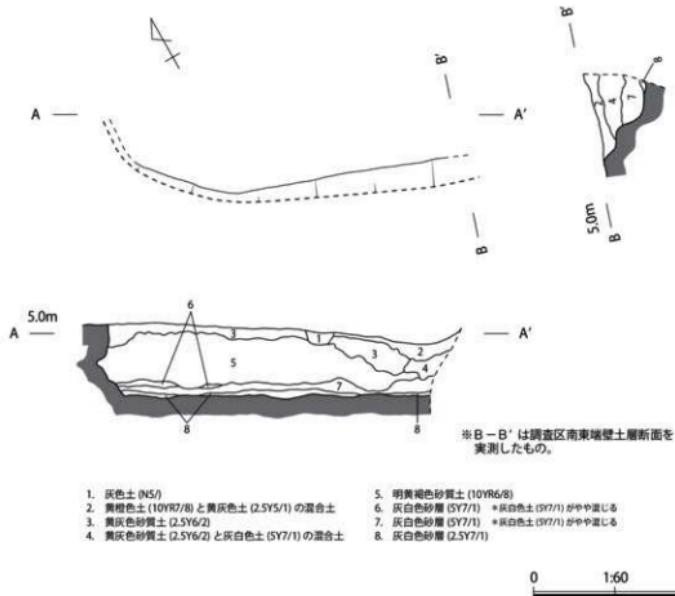
第13図 SK04平面・土層断面図



第14図 SK04出土遺物実測図

SD01（第8・15図）

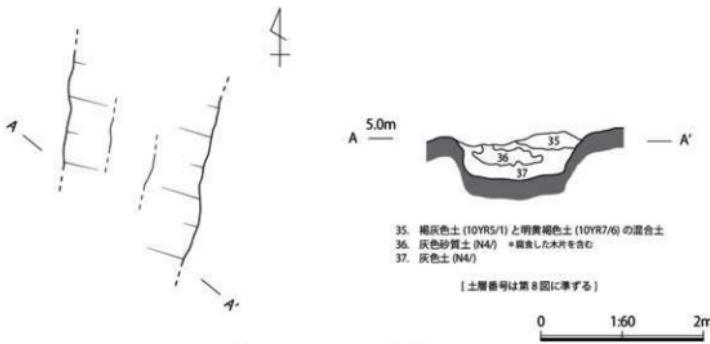
調査区東端、北東角に位置する。調査区東端の北壁側から東壁側にかけて、上層に黄灰色土や明黄褐色土の砂質土が、下層に0.2m程度の厚みで灰白色砂層が堆積していた。また、灰白色砂層には水の流れの痕跡がみえ、これらのことから溝と判断した。調査途中で気づき、上端については概に掘り下げていたことから、底面（下端）のみを確認し、上端は土層断面から復元し図化した。この溝は、北から南東方向に向かう溝の南側縁辺部の一部と思われる。埋土から遺物は出土していないが、47層を基盤とし、後述する47層出土遺物の時期よりは新しいと考えられる。



第15図 SD01平面・土層断面図

SD02 (第8・16図)

調査区中央付近、E 6区に位置する。南北方向に褐色土が検出され、北側、南側共に調査区外へ続くことから溝とした。検出面標高5.2m、現況で幅1.85m、長さ2m、深さ0.6mを測る。溝の埋土は、上層から褐色土、灰色砂質土、灰色土で、灰色砂質土には腐食した木片が多く含まれていた。36層は37層をオーバーハングしたように堆積し、土質、混入物から、土層内を流れる水の抜け道のような部分なのかもしれない。37層灰色土から図化は出来なかったが、弥生土器、縄文土器の破片が出土している。



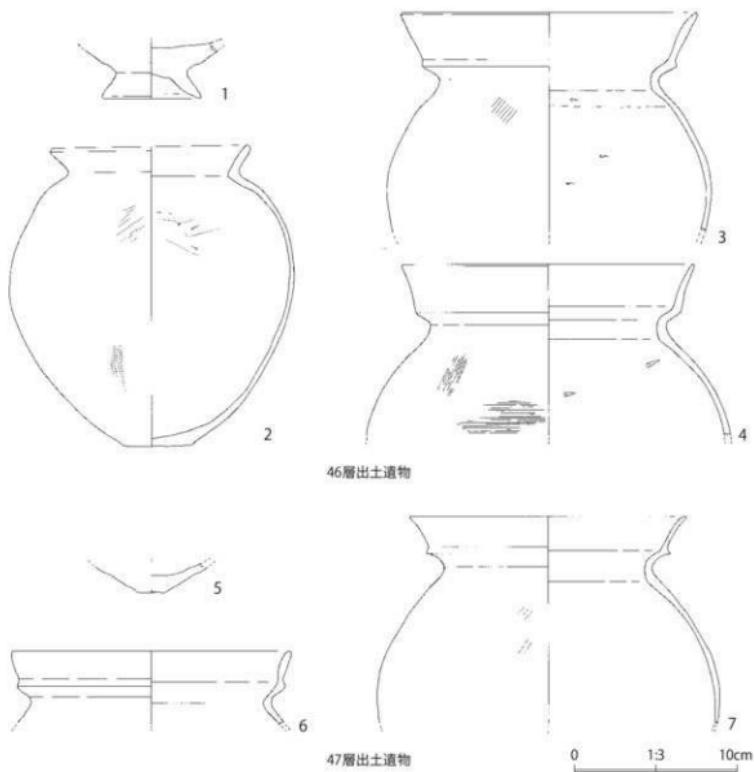
第16図 SD02平面・土層断面図

第3項 46・47層出土遺物 (第17図)

第3項では46層と47層の出土遺物を掲載する。

17-1～4は46層出土遺物である。17-1は低脚環の脚部である。「ハ」の字状に開き、やや厚手のもので赤褐色を呈する。17-2は単純口縁の甕で、器壁は薄く、淡黄褐色を呈する。口径11.9cm、底径4.2cm、器高18.4cmを測る。口縁部を外方に折り曲げたもので、底部は平底である。内外面共風化しているが、外面上半に斜め方向のハケ目、下半に縱方向のハケ目、内面にヘラ削りがわずかにみられる。17-3、4は複合口縁の甕である。全体的に薄手で、口縁部は外反し、端部にかけて薄く引き出している。外面にハケ目、内面にヘラ削りがみられる。これらの出土遺物は草田5～6期に相当すると思われる。

17-5～7は47層から出土した遺物である。17-5は壺、甕類の底部で、底径1.7cmを測る小さなものである。胎土に0.1～0.2cmの白色の砂粒を多く含んでいる。17-6、7は複合口縁の甕である。17-6は口縁部がやや外方に外反し、端部を丸くおさめるものである。17-7は17-3、4と同じ形態のものである。47層から出土した遺物の時期は草田5～6期に相当し、46層出土の土器と時期差がなく、堆積した時期も大差ないと考えられる。



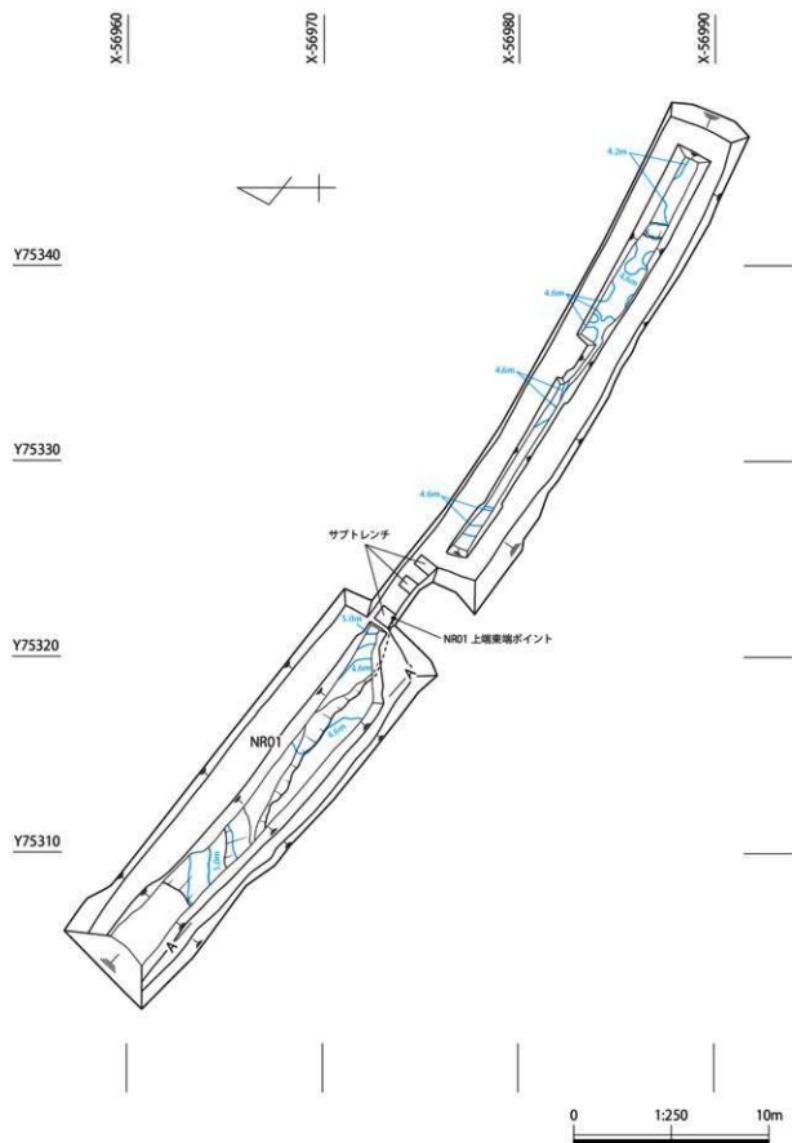
第17図 46・47層出土遺物実測図

第4項 第2遺構面（第18～23図）

NR01（第18・19図）

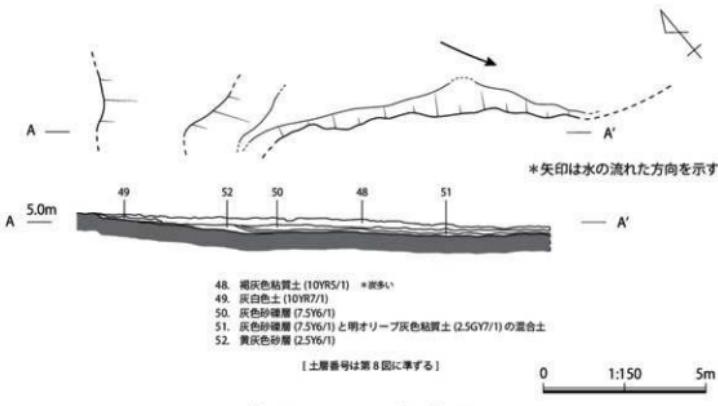
調査区西側、B 2～D 4 区に位置する。現況の地形や遺構の検出状況、土層の堆積状況から、北側谷部から南側に延びる自然流路と考えられ、現況で幅23m、深さ0.4mを測る。

48層～52層は流路の埋土である。上層（48層）は厚さ0.1～0.2mの厚さで堆積し、炭を多く含む土層で、弥生時代前期の土器が出土している。中層（50層）は0.1～0.2mの礫や砂を多く含む土層である。砂礫層に多くの縄文土器や石製品が混じり、今回の調査で一番多くの遺物が出土している。土器は縄文時代中期前半から晩期のもので、晩期末の突帯文土器が含まれることから同時期の堆積土層と考えられる。石製品には、くぼみ石、敲石、石錐、打製石斧、石礫などがある。下層（51層）は50



第18図 第2遺構面全体図

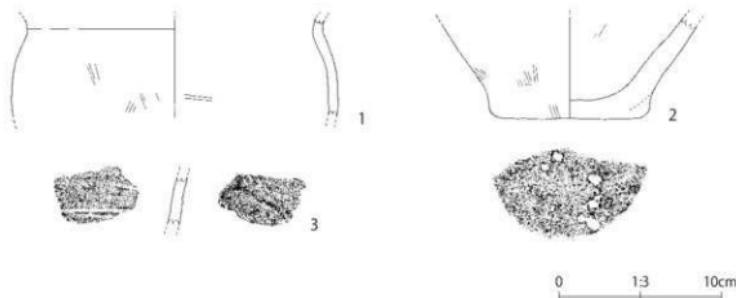
層の灰色砂礫層と地山土層、明オリーブ灰色粘質土が混じる土層である。この土層からも縄文土器や石製品が出土し、土器は縄文時代前中期から後期のものである。土器のなかに1点晩期の土器があり、この土器は上層からの混入物の可能性が高い。51層は出土遺物から後期の堆積土層と考えられる。石製品は石錐、磨り石、スケレーパー、石鎌が出土している。土層ごとの遺物出土状況から、NR01は縄文時代後期から堆積し、弥生時代前期に埋没したことが確認された。



第19図 NR01平面・土層断面図

出土遺物（第20～23図）

20-1～3は上層（48層）の出土遺物である。20-1は口縁が緩く外反する壺である。風化しているが、内外面にわずかにハケ目がみられ、弥生時代前期のものと思われる。20-2は弥生時代前期、壺、甕類の底部で、底径9.8cmを測る。20-3は内面に2枚貝条痕とナデが、外側にナデの調整痕がみられる縄文土器である。



第20図 NR01上層（48層）出土遺物実測図

21-1~14は中層（50層）から出土した縄文土器である。21-1~4は晩期の土器である。21-1、2は突帯文土器である。21-1は口縁端部からやや下がった位置に指で押されたような突帯がめぐる、晩期末の土器である。21-2は口縁端部に突帯がめぐり、ヘラ状工具によるV字状の刻目が施される。晩期終末である。21-3は頸胴部が明瞭に屈曲し、口縁部が緩やかに外反しながら立ち上がる浅鉢の頸胴部である。21-4は、頸胴部が内湾しながら屈曲し、口縁部へ続く浅鉢の頸胴部である。屈曲部外面に浅い刺突文を施し、晩期初頭と思われる。21-5、6は後期の土器である。21-5、6は縄文を地文とし、口縁端部に沈線を施すものである。6の縄文は風化により僅かしかみえない。21-7~9は中期末の土器である。21-7は縄文と縄文の間に太めの沈線文がみられ、磨消縄文になっていない。21-8は外面の地文が二枚貝条痕である。21-9は、キャリバー系口縁で、口縁端部に巻貝の殻頂による円形刺突文と2条の沈線を施す。21-10は外面地文に撚糸文がみられ、中期後半、里木Ⅱ式のものである。21-11は外面に太めの縄文が施され、中期前半に相当する。21-12~14は底部で中期から後期のものである。21-14の側面には撚糸文がみられ、底部外面には6mm~8mm程の円形状のくぼみと筋状の痕跡がみえ、種子圧痕の可能性が考えられる。

第22図は中層（50層）から出土した石製品である。22-1~5は黒曜石である。22-1、2は石鏃で、22-1は抉りの深い凹基式、22-2は平基式である。22-3は使用痕のある剥片で長辺側に微細剥離痕や磨滅がみられる。スクレーパーとして使用されていた可能性が考えられる。22-4、5は、楔形石器である。22-4は上下両端につぶれがみえる。22-5は断面三角形状を呈し、上端にはつぶれがみえ、下端にはつぶれはみられず尖っている。22-6は流紋岩の未成品で、一部に加工痕がみえる。22-7~9は石錘である。22-7は扁平な楕円形の礫を素材とする。長軸両端を敲打調整によって縄掛け部を作り出している。短軸の一方は破損し、もう一方に摩耗痕のある抉りがみられることから、短軸側にも縄掛け部をもっていたものと考えられる。石材は流紋岩である。22-8は扁平な台形状の砂岩を使用している。礫の側縁に細かな調整剥離を施し、長軸両端に縄掛け部を作り出している。22-9は扁平な台形状の礫を素材とする。長軸両端を敲打調整し縄掛け部を作り出している。石材は不明である。22-10、11は打製石斧である。22-10は残存長7.7cmの小形打製石斧である。片面の刃部は磨滅し、滑沢である。デイサイト製。22-11は、残存長15.3cm、最大幅11.0cmを測る撥型打製石斧である。扁平な礫そのものを素材とするもので、刃部と側縁に加工が施され、刃部中央は破損している。素材はデイサイトである。22-12は砂岩製の敲石で、上端は折損している。下端に敲打痕があり、やや凹んでいる。22-13は安山岩製の敲石である。表裏面と側面の一部に敲打痕があり、側面の一部に僅かな平坦面と擦痕が認められる。手の中に収まる大きさで利便性があり、複合的に使用されていたと思われる。22-14は石皿または砥石である。表面は僅かに凹み滑らかで、使用痕がみえる。裏面も平坦であるが、使用された痕跡はなく、自然面をとどめる。素材は凝灰岩製。

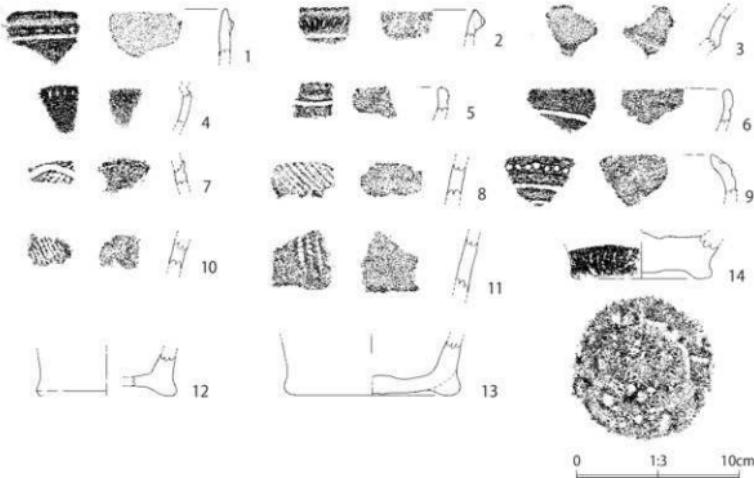
第23図は下層（51層）の出土遺物である。23-1は晩期の無刻目突帯文土器で、上層からの混入物と考えられる。23-2~11は後期の土器である。23-2は深鉢の肩部で、縄文を地文とし、直線や弧状の沈線文を描き、直線文の末端に円形の刺突文を施している。後期中葉、権現山式である。23-3は、地文は風化しており判然としないが、縄文または斜線文で、横走する3条の沈線文が描かれている。後

期中葉、沖丈式である。23-4は注口土器で、外面に丁寧なヘラミガキが施されている。23-5はボール型の浅鉢で、内外面にミガキ調整を施す。後期中葉である。23-6は口縁部上面を円形の刺突文帯で飾り、その間に沈線文を施している。後期前葉、布勢式である。23-7は深鉢の肩部である。地文は風化により不明で、沈線文で文様を描いている。福田式または布勢式である。23-8は口縁端部に縄文を施し、沈線文を描く深鉢である。九州系、小池原上層式と思われる。23-9は非常に細かな節の縄文地に梢円形か渦巻の沈線文を描いたもので、中津式である。23-10、11も中津式と思われる破片で沈線文が描かれている。23-12、13は中期末のものである。23-12は口縁部外面に凹点文と沈線による曲線文を描いている。23-13は波状口縁の口縁部である。口縁部上面に縄文と「J」字状の沈線文を、外面に円形の沈線文を描いている。23-14は胴部外面に隆帯を貼り付け、縄文を施している。前期末または中期前葉のものと思われる。

23-15～23は石製品である。23-15は長さ1.7cmの小さな四基式石鏃である。23-16はサヌカイト製、平基式の石鏃である。23-17は赤褐色を呈する碧玉の石鏃である。23-18は黒曜石の石錐で、長さ2.9cm、幅1.05cmを測る。全面を加工し、上下両端に擦痕がみられる。23-19は黒曜石製の楔形石器である。上下両端と側面の一方につぶれがみえる。23-20は小形の石斧で、頁岩製である。23-21は流紋岩製のスクレーパーで、破損しているが一部に加工痕がみられる。23-22は玄武岩の磨製石斧で、両面刃部は丁寧に研磨されている。表面刃部に刃こぼれとみられる小剝離痕が、裏面に擦痕がみられる。23-23は敲石である。下端に敲打痕が、上端に擦痕が認められる。

註

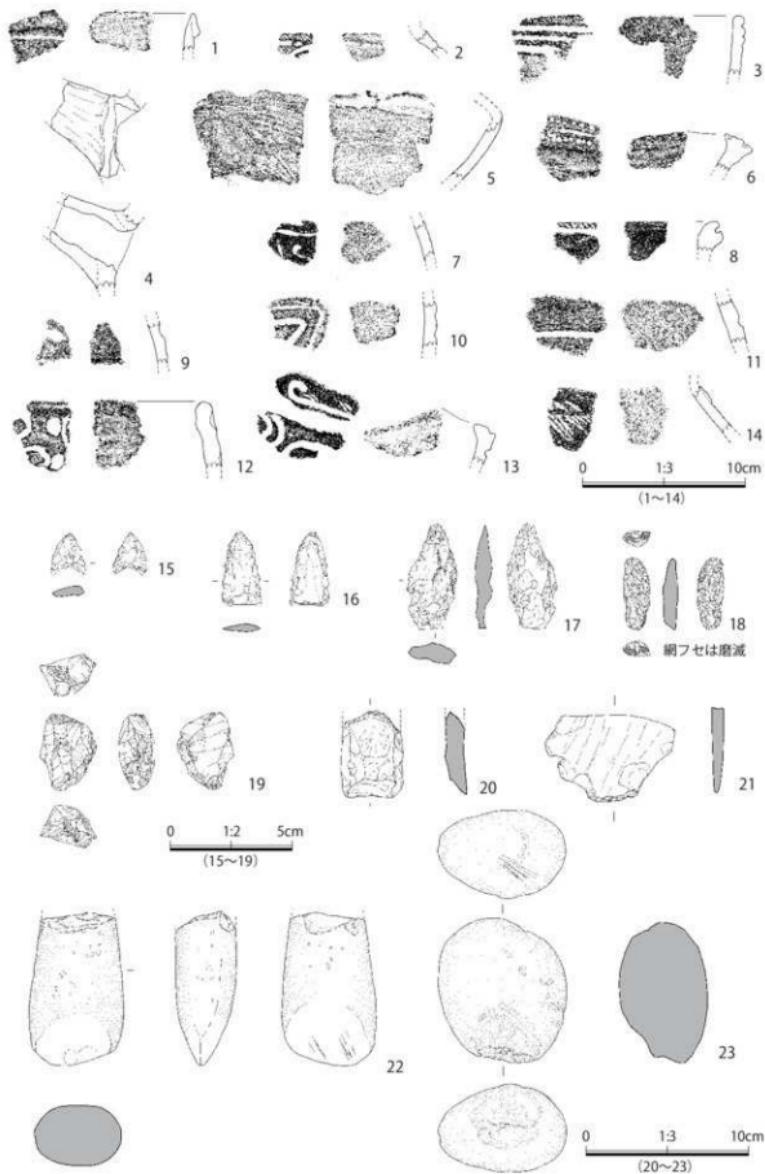
(2) 三瓶自然館サヒメル 企画情報課 主幹 中村唯史氏のご教示による。



第21図 NR01中層（50層）出土遺物実測図①



第22図 NR01中層（50層）出土遺物実測図②



第23図 NR01下層（51層）出土遺物実測図

第5章 総括

今回の調査では、縄文時代後期から弥生時代前期、弥生時代終末、弥生時代終末以降から古墳時代中期以前、古墳時代中期の遺構を確認することができた。遺構のなかには時期を特定できる遺物が出土していないものもあり、それについては層序関係から時期を判断した。土坑4基、溝2条、自然流路を確認し、本調査区が生活面として機能していた時期はあるものの、建物跡と判断できる遺構がないことから、集落の周辺部と考えられる。今回の調査結果を踏まえて、二部遺跡の変遷を時代ごとに述べる。

二部遺跡で一番古い遺構は、縄文時代後期から弥生時代前期にかけて堆積した自然流路（NR01）である（第24図①）。地形や調査位置から、北側から延びる丘陵先端の細い谷の出口付近と思われる。堆積土層中層、下層には縄文時代前期末または中期前半から晩期末まで幅広い土器が含まれ、石製品も多い。多くの土器は小片で磨滅し、土層と一緒に流れ堆積したものと考えられる。土器のなかには九州系の小池原上層式のものや島根県西部の沖式のものがみられ、他地域の要素が確認される。文様意匠には中期末から後期の土器に沈線文や刺突文、凹点文、沈線端部刺突文などがみられ多様である。石製品は石錐などの礫石器の他、石鐵が出土している。なかでも黒曜石の石鐵は隠岐島の久美のものと思われる。山陰地方では、石鐵は縄文時代後期になると黒曜石よりサヌカイトが多くなる傾向にあるが、二部遺跡では黒曜石が多く（表1参照）、隠岐島に近いためなのかもしれない。また、石鐵は小さめで、原石や石核がみられないことから、黒曜石が隠岐島からダイレクトに入ってきたような場所ではなく、何ヶ所か経由してこの場所に持ち込まれたと思われる¹⁰。北側に北山山系が、南側に宍道湖が存在する当地域は、位置的にも狩猟、採集や漁に適した場所と考えられ、このことが礫石器と石鐵のような出土遺物にも現れている。但し、土器の状態から推察すると、当該期の遺構は本遺跡に近い場所ではなく、やや離れた場所に存在していた可能性が考えられる。

弥生時代終末頃には、調査区東側地山面に地山によく似た土層が堆積する。弥生時代終末（草田5～6期）の土器が含まれ、二重口縁の甕片や完形の単純口縁の甕が出土している。土器は壊れているが一個体が纏まって出土し、近場から流れ込んだような状況を呈している。この土層を基盤として土坑1基（SK04）と溝2条（SD01、02）を検出し（第24図②）、SK04から草田5期の土器が出土している。調査区内で確実に建物跡と判断される遺構は確認されていないが、基盤層の遺物出土状況から考えると、北側から北東側の低丘陵に当該期の集落跡が存在すると考えられる。本遺跡北東側に位置するスモト遺跡から弥生時代終末から古墳時代初頭の遺構が確認されており、一連の集落となる可能性もあるう。

SK02、03（第24図③）から遺物は出土していないが、層序からSK01より古いと考えられ、弥生時代終末から古墳時代中期以前の遺構と捉えている。

古墳時代中期（第24図④）の遺構として、SK01を確認している。他に遺構はなく、土坑のみが存在する状況である。スモト遺跡でも古墳時代の遺構、遺物は少なく、また、当地域周辺においても明確な集落跡は今のところ確認されていない。調査区周辺は古墳時代に多くの古墳が築造されたところ

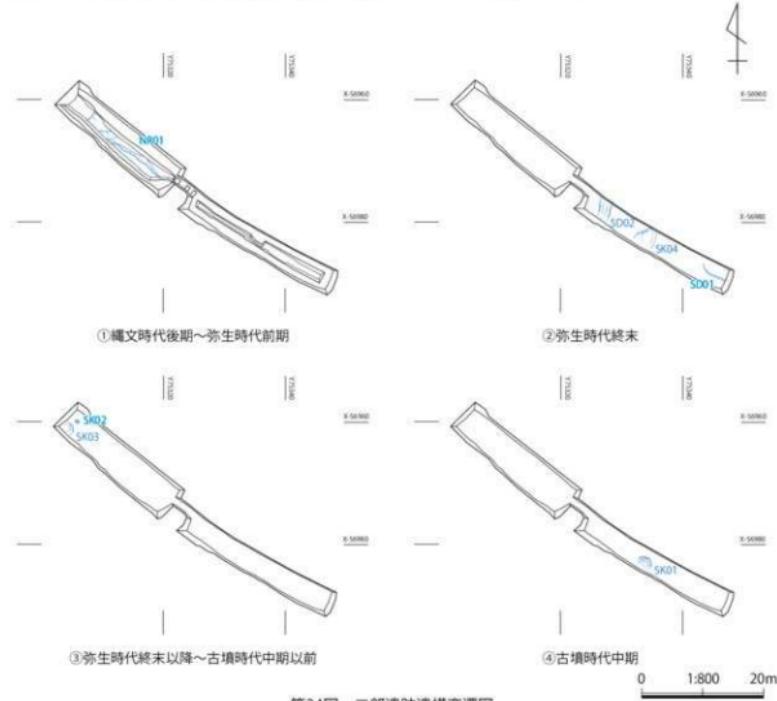
であり、それに携わった人々の住居跡などが発見されてもおかしくはなく、今後の調査成果の蓄積に期待したい点である。

SK01上面には、8世紀第4四半期以降の土層が堆積している。古墳時代中期から8世紀第4四半期まで時期幅があり、地形や位置的環境から推察すると、浸食や堆積が繰り返され、最終的に10層が堆積したと思われる。10層より上層は水田の耕作土と考えられ、現代に至るまで水田として利用されていたようである。

以上、二部遺跡の様相を述べてきた。出土遺物や遺構の検出状況から、本遺跡周辺では第24図に示したように各期において断続的に集落が営まれていたことが想定される。また、土層や遺物の磨滅の度合い、周辺の遺跡の調査から判断すると生活圏が高地から低地へと移動した可能性が考えられ、これは穴道湖水域の後退という古地形の変化と密接な関係があるものと考えている。

また、自然流路からではあるが、縄文時代前期末から晩期の遺物が纏まって出土したことは、当地域が漁撈にも狩猟にも適した集落形成にとって利便性の高い場所であったと思われる。

縄文時代の遺跡が少ない本調査区周辺において、このような資料が得られたことは有意義であり、今後さらに資料に蓄積が進み、集落の実態が解明されることを期待したい。



第24図 二部遺跡遺構変遷図

第5章 総括

註

(3) 島根県古代文化センター研究員 稲田陽介氏から石器の产地や石材利用についてご教示を得た。また、それについて2009年に中四国縄文研究会20周年記念大会・第2回西日本縄文文化研究合同大会にて環瀬戸内地域の打製石器利用というテーマのなかで「島根地域の打製石器石材利用の様相—山陰地方における縄文時代の石材流通（予察）一」という研究発表がされ、本文で記述したことについても述べられている。

【参考文献】

中村唯史2014「6. 縄文時代の島根県の古地形と三瓶火山の活動の影響」『山陰地方の縄文社会』古代文化センター研究論集 第13集 島根県古代文化センター

表1 二部遺跡 - NR01出土黒曜石・サヌカイト・碧玉計測表

黒曜石

石材	種類	部位別出土個数（重量/g）				種類別個数 (重量/g)
		上層(48個)	中層(50個)	下層(51個)	出土層不明	
黒曜石	石器(AH)	0	2(1.9)	3(2.0)	1(1.0)	6(4.9)
	石器(Br)	0	0	1(2.2)	0	1(2.2)
	研磨石器(PE)	1(5.2)	2(8.1)	2(15.8)	0	5(29.1)
	石核(Sc)	0	3(55.6)	5(92.0)	0	8(147.6)
	剥片(PF)	3(2.7)	46(92.6)	31(110.7)	11(16.7)	91(222.7)
	使用歴のある剥片(UF)	0	6(28.0)	4(11.5)	0	10(39.5)
未成品		0	1(0.9)	0	0	1(0.9)
部位別個数(重量/g)		4(7.9)	60(187.1)	46(234.2)	12(37.7)	122(446.9)

サヌカイト

石材	種類	部位別出土個数（重量/g）				種類別個数 (重量/g)
		上層(48個)	中層(50個)	下層(51個)	出土層不明	
サヌカイト	石器(AH)	0	0	1(2.0)	0	1(2.0)
	剥片(PF)	0	0	1(1.7)	1(3.0)	2(4.7)
部位別個数(重量/g)		0	0	2(3.7)	1(3.0)	3(6.7)

碧玉

石材	種類	部位別出土個数（重量/g）				種類別個数 (重量/g)
		上層(48個)	中層(50個)	下層(51個)	出土層不明	
碧玉	石器(AH)	0	0	1(6.8)	0	1(6.8)

統計

NR01出土 黒曜石・サヌカイト・碧玉	部位別出土個数（重量/g）				合計数 (重量/g)
	上層(48個)	中層(50個)	下層(51個)	出土層不明	
	4(7.9)	60(187.1)	49(244.7)	13(20.7)	126(460.4)

土器

遺物 番号	タリット	出土位置	出土土層	種類	器種	法線 (cm)			調整・文様の状態	色調	備考
						(左) 直径	(中) 高さ	(右) 厚さ			
4-1	T-1	曲壁 10 番	生土層	甕	甕	16.3	—	4.0	内 黒化 外 白化	灰田5~6期	
4-2	T-2	曲壁 10 番	土削層	高杯	—	—	3.4	—	内 黒化 外 白化	古墳時代中期	
4-3	T-3	曲壁 10 番	土削層	杯	—	8.2	3.4	—	内 黒化 外 白化	8世紀前半	
7-1	D4	曲壁 10 番	生土層	甕	—	—	6.1	—	内 ハラ模様文	灰田5~6期	
7-2	G9	曲壁 10 番	土削層	甕	—	15.2	—	4.4	内 ナデ、ハケ口 外 ナデ	古墳時代後期	
7-3	E6	曲壁 10 番	土削層	小壺	—	—	2.1	—	内 回転ナデ 外 回転ナデ	暗オーラーブ色 青灰黒	
7-4	F7	曲壁 10 番	土削層	杯	13.3	—	4.1	—	内 回転ナデ 外 回転ナデ	灰 外 白化	8世紀後半~9世紀前半
7-5	F8	曲壁 10 番	土削層	甕	—	—	5.8	—	内 タカキ麻 外 アチ具縫	灰 外 白化	
10-1	F7	SK01	曲壁 15 番	生土層	甕	—	—	5.0	内 ナデ 外 ナデ、ヘラ割目	粉 外 粉	早田5~6期
10-2	F7	SK01	曲壁 15 番	土削層	高杯	—	8.6	2.9	内 黒化 外 傷かにしづらし	灰 外 淡黄黒	
10-3	F7	SK01	曲壁 15 番	土削層	高杯	—	8.6	6.2	内 黒化 外 しづらし	外 粉 外 粉	古墳時代後期
10-4	F7	SK01	曲壁 15 番	土削層	甕	20.9	—	20.6	内 ナデ、ハケ口 外 ナデ、ヘラ割目	淡黄黒 外 淡黄黒	古墳時代中期
14-1	F7	SK04	曲壁 45 番	生土層	甕	21.2	—	7.6	内 ナデ、ハケ口 外 ハラ模様	灰 外 白化	早田5~6期
17-1	G9	曲壁 45 番	生土層	低脚甕	—	6.9	3.5	—	内 ナデ 外 ナデ	水黒色 外 水黒色	
17-2	G9	曲壁 45 番	生土層	甕	11.9	4.2	18.4	—	内 ハケ口 外 ハラ割目	淡黄黒 外 淡黄黒	早田5期
17-3	G9	曲壁 45 番	生土層	甕	18.0	—	13.5	—	内 黒化 外 黒化	灰田5~6期	
17-4	G9	曲壁 45 番	生土層	甕	18.8	—	10.5	—	内 ハケ口 外 黒化	淡黄黒 外 淡黄黒	早田5~6期
17-5	F8	曲壁 47 番	生土層	底部	—	1.7	1.8	—	内 黒化 外 黒化	灰 外 白化	
17-6	G9	曲壁 47 番	生土層	甕	17.0	—	4.5	—	内 ナデ 外 ナデ	粉 外 粉	早田6期
17-7	G9	曲壁 47 番	生土層	甕	17.0	—	12.7	—	内 黒化 外 黒化	灰 外 白化	早田5期 表面にスス付着
20-1	D4	NB01	曲壁 48 番	生土層	甕	—	—	6.0	内 ハケ口 外 ハケ口	粉 外 粉	古墳時代後期
20-2	D4	NB01	曲壁 48 番	生土層	底部	—	9.8	6.3	内 ハケ口 外 黒化	灰 外 ぶい黄黒	
20-3	D4	NB01	曲壁 48 番	縄文土層	—	—	—	3.0	内 ナデ 外 ナデ	灰 外 淡黄	
21-1	D4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	深鉢	—	—	2.8	内 ハラ押されたような形状 外 ハラ押	灰 外 淡黄黒	御附末
21-2	C3	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	深鉢	—	—	1.7	内 ハラ状工具による切目突帯 外 ナデ	灰 外 淡黄黒	御附末
21-3	C4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	浅鉢	—	—	2.1	内 ナデ 外 ナデ	浅黄黒 外 淡黄	御附
21-4	C3	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	浅鉢	—	—	2.4	内 制限環底部に削り目 外 ナデ	灰 外 淡黄黒	御附削道
21-5	D4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	—	—	2.0	内 縄文と波線文 外 ナデ	灰 外 ぶい黄黒	復原 (中津式か福田K式)	
21-6	C4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	—	—	1.5	内 ナデ 外 ナデ	灰 外 ぶい黄黒	復原 (中津式か福田式の古跡調)	
21-7	D4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	—	—	1.5	内 縄文 外 不明	灰 外 ぶい黄黒	中間末	
21-8	C4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	—	—	1.9	内 一枚貝による彫痕 外 ナデ	灰 外 淡黄黒	中間末	
21-9	C4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	—	—	2.3	内 ナデ 外 深縄文、円形突起	灰 外 ぶい黄黒	中間末	
21-10	D4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	—	—	1.5	内 ナデ 外 ナデ	灰 外 ぶい黄黒	中間後半 里木式	
21-11	C3	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	—	—	3.5	内 大丸の縄文 外 ナデ	灰 外 黒刺毛	中間後半 和元式	
21-12	C4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	底部	—	8.2	2.6	内 黒化 外 黒化	灰 外 黒刺毛	中間から後期
21-13	C3	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	底部	—	10.8	3.4	内 黒化 外 底部不明の深鉢	灰 外 ぶい黄黒	中間から後期
21-14	D4	NB01	曲壁 50 番	縄文土層	底部	—	8.6	2.0	内 黒化 外 黒化	灰 外 黒化	中間後半から末
Z3-1	C3	NB01	曲壁 51 番	縄文土層	深鉢	—	—	2.3	内 ナデ 外 ナデ	灰 外 ぶい黄黒	複開
Z3-2	C4	NB01	曲壁 51 番	縄文土層	深鉢	—	—	1.5	内 縄文、波線文 外 不明	灰 外 ぶい黄黒	複開中壁 植込山式
Z3-3	D4	NB01	曲壁 51 番	縄文土層	深鉢	—	—	3.6	内 縄文、3条の波線文 外 ナデ	灰 外 ぶい黄黒	複開中壁 神尤式
Z3-4	C4	NB01	曲壁 51 番	縄文土層	底部	—	—	5.0	内 ヘラエギホ 外 ナデ	灰 外 ぶい黄黒	外側一部底面 推測
Z3-5	C3	NB01	曲壁 51 番	縄文土層	底部	—	—	4.9	内 二方朱 外 二方朱	灰 外 ぶい黄黒	複開

遺物観察表

土 器

遺物 番号	グリッド	出土位置	出土土層	種類	部類	寸法(cm)			調査・文様の回数	色調	備考
						横幅	奥行	高さ			
Z3-6	D4	NR01	南壁51層	縞文土器	深鉢	—	—	2.3	外：口縁部上面に円切削文 内：波線文	外：灰 内：赤褐色	後期前葉 布物式
Z3-7	D4	NR01	南壁51層	縞文土器	深鉢	—	—	1.8	外：波線文 内：波化	外：赤褐色 内：赤褐色	後期前葉 印田式から布物式
Z3-8	C4	NR01	南壁51層	縞文土器	深鉢	—	—	1.9	外：口縁部上面に圓文と波線文 内：波化	外：黒色 内：黒色	後期前葉 九郎系、小池原上層式
Z3-9	C3	NR01	南壁51層	縞文土器	深鉢	—	—	1.8	外：波の顎かへ繩文、波線文 内：波化	外：灰 内：黒色	後期前葉 中井式
Z3-10	C4	NR01	南壁51層	縞文土器	—	—	—	3.3	外：波線文 内：波化	外：浅青褐色 内：浅青褐色	後期前葉 中井式
Z3-11	D4	NR01	南壁51層	縞文土器	深鉢	—	—	2.9	外：波線文 内：波化	外：灰青褐色 内：灰青褐色	後期前葉 中井式から印田式の占領
Z3-12	C4	NR01	南壁51層	縞文土器	—	—	—	3.8	外：波文、波線文(波線文 ナデ)	外：灰 内：黒褐色	中期末
Z3-13	D4	NR01	南壁51層	縞文土器	深鉢	—	—	2.5	外：口縁部上面に圓文と波線 内：波化 ナデ	外：黒褐色 内：黒褐色	中期末
Z3-14	C3	NR01	南壁51層	縞文土器	—	—	—	3.4	外：縞文 内：波化	外：淡褐色 内：褐褐色	中期前葉 帆元式 帆元末の可能性あり

石製品

遺物 番号	グリッド	出土位置	出土土層	種類	寸法(cm)			重量(g)	石材	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
Z2-1	C4	NR01	南壁50層	石頭	2.1	1.4	0.4	1.0	黒曜石	四基式
Z2-2	C4	NR01	南壁50層	石頭	2.1	1.3	0.5	0.9	黒曜石	平基式
Z2-3	D4	NR01	南壁50層	スカラベー	4.0	2.3	1.0	9.7	黒曜石	
Z2-4	C4	NR01	南壁50層	複合石頭	2.6	1.6	0.7	4.6	黒曜石	上下両面につぶれ
Z2-5	D4	NR01	南壁50層	複合石頭	2.3	2.3	0.9	3.5	黒曜石	上端につぶれ
Z2-6	C3	NR01	南壁50層	スクレイバー	3.9	6.2	0.7	20.0	玄武岩	一部に加工痕
Z2-7	C4	NR01	南壁50層	石頭	5.4	4.1	1.0	30.0	玄武岩	上下両面と側面の一方に鋸歯形
Z2-8	D4	NR01	南壁50層	石頭	6.3	5.4	0.9	60.0	砂岩	上下両面に鋸歯形
Z2-9	D4	NR01	南壁50層	石頭	6.6	6.2	0.9	65.3	手明	上下両面に鋸歯形
Z2-10	C4	NR01	南壁50層	打製石斧	7.7	5.3	1.9	110.0	デザイド	一部に擦痕がみられる
Z2-11	D4	NR01	南壁50層	打製石斧	14.6	11.1	2.3	450.0	デザイド	一部破損
Z2-12	C4	NR01	南壁50層	砾石	12.4	8.5	5.4	710.0	砂岩	片面に擦痕
Z2-13	D4	NR01	南壁50層	砾石	9.8	9.3	5.0	650.0	安山岩	
Z2-14	D4	NR01	南壁50層	石頭、砾石	15.0	9.9	4.1	840.0	凝灰岩	
Z2-15	C3	NR01	南壁51層	石頭	1.7	1.4	0.4	0.8	黒曜石	四基式
Z2-16	D4	NR01	南壁51層	石頭	3.0	1.6	0.3	2.0	サメカイト	平基式
Z2-17	C3	NR01	南壁51層	石頭	4.3	2.0	0.8	6.8	碧玉	
Z2-18	C4	NR01	南壁51層	石頭	2.9	1.1	0.6	2.2	黒曜石	上下両面に擦痕
Z2-19	D4	NR01	南壁51層	複合石頭	3.2	2.3	1.5	10.9	黒曜石	上下両面、片面側面につぶれ痕
Z2-20	C4	NR01	南壁51層	打製石斧	5.3	3.8	1.2	39.4	頁岩	
Z2-21	D4	NR01	南壁51層	スカラベー	5.3	7.9	0.7	36.5	流紋岩	
Z2-22	D4	NR01	南壁51層	複合石頭	9.1	6.8	3.8	320.0	玄武岩	碧玉、小石礫
Z2-23	C4	NR01	南壁51層	砾石	8.7	7.9	5.4	520.0	玄武岩	打製石、標本

写真図版



調査前全景
(南東から)



調査区西側
南壁土層断面
(北西から)



調査区東側(東端部)
南壁土層断面
(北西から)



調査区西側完掘状況（南東から）



調査区東側完掘状況（北西から）



調査区東側完掘状況（南東から）



SK01遺物出土状況（北西から）

図版4



SK01 (北西から)



SK02 (南西から)



SK03 (北西から)



SK04 (北東から)



SD01 (南西から)



SD02土層断面
(北東から)



SD02 (北西から)



遺物包含層（46層）
出土遺物



遺物包含層（47層）
出土遺物



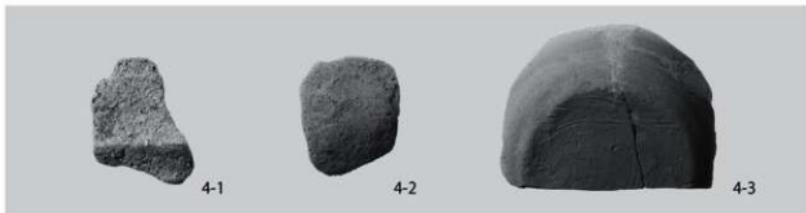
NR01遺物出土状況
(土器)



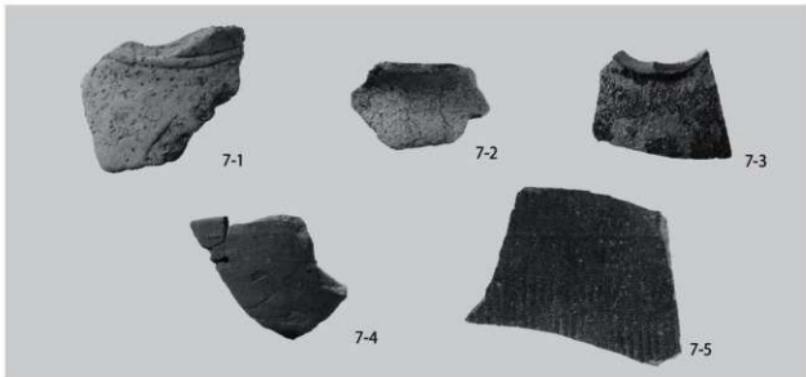
NR01遺物出土状況
(石製品)



NR01 (北西から)



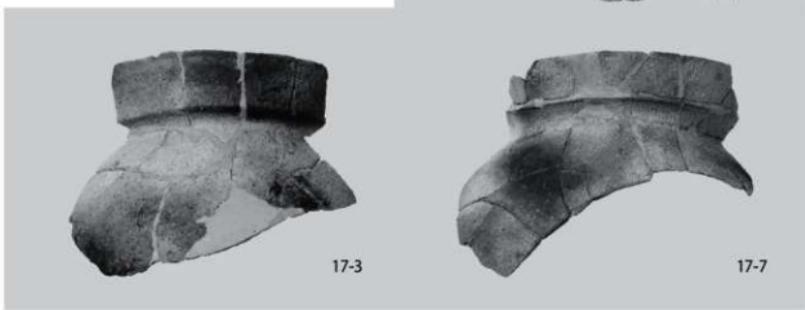
試掘調査出土遺物



10層出土遺物



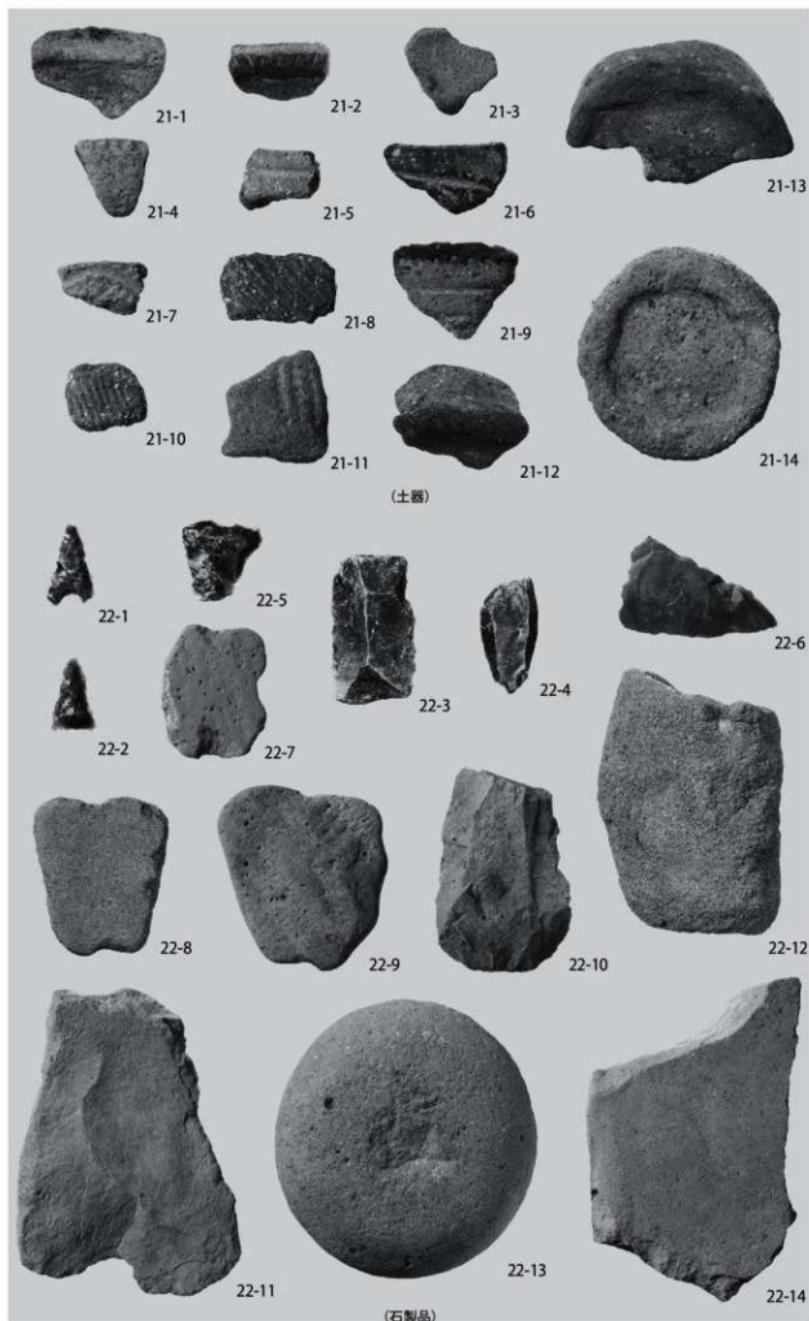
SK01出土遺物



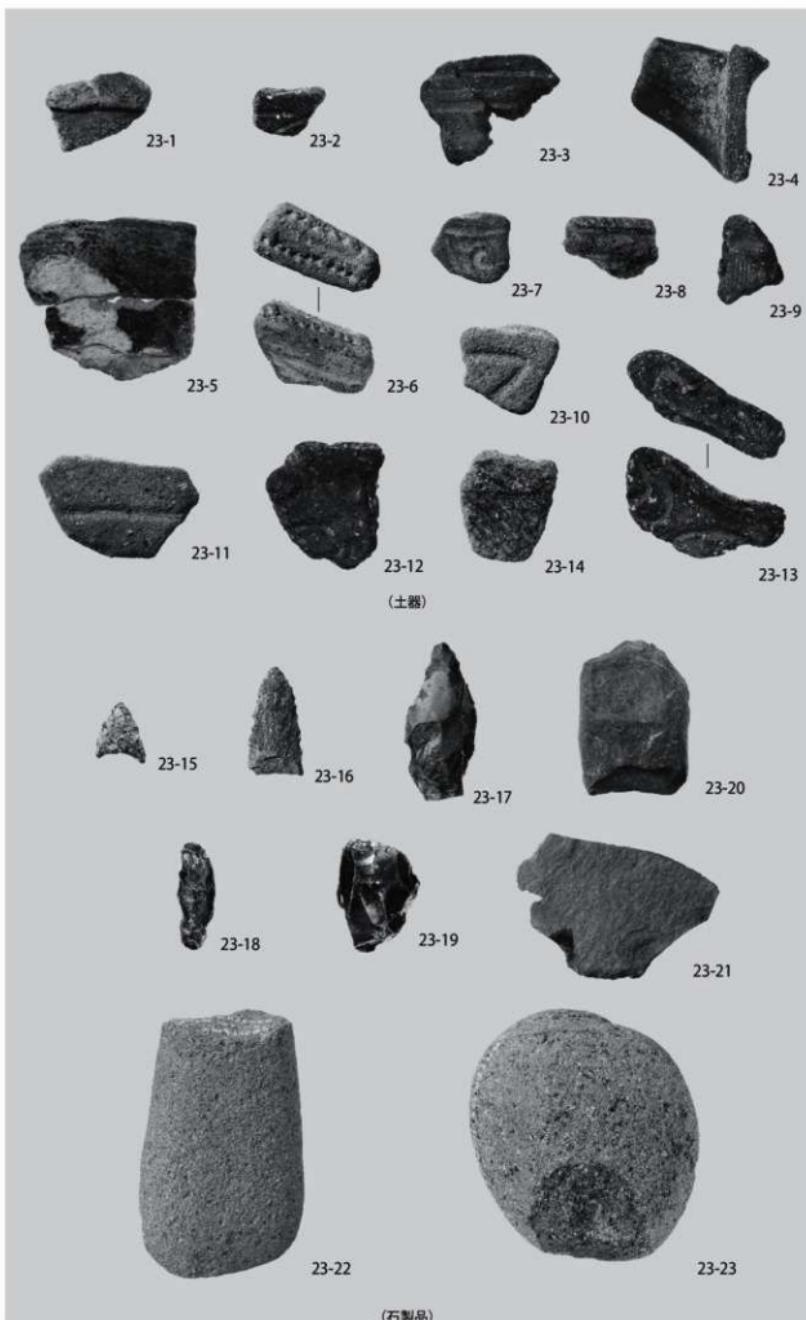
46・47層出土遺物



NR01上層（48層）出土遺物



NR01中層（50層）出土遺物



報告書抄録

ふりがな	にぶいせき						
書名	二部遺跡						
副書名	市道古志大野線道路改良事業に伴う発掘調査報告書2						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第168集						
編著者名	廣濱貴子 德永隆						
編集機関	松江市教育委員会(松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地						
	TEL:0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ振興財団 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1						
	TEL:0852-85-9210						
発行年月	2015年8月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
二部遺跡	しまねけん 島根県 まつしま 松江市 こもしちょう 古曾志町 ほんじまち 352番2外	32201	D-1128	35° 29' 00" 132° 59' 48"	20130419 ～ 20130614	257m ²	市道古志 大野線道路 改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
二部遺跡	集落跡	縄文時代 ～ 古墳時代	自然流路 土坑 溝	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石製品	縄文時代前期末～弥生時代前期の 遺物が出土した自然流路を検出。 弥生時代終末の土坑や溝、古墳時 代中期の土坑を検出。 遺物包含層より縄文時代後期～8世 紀第4四半期の遺物が出土。		

松江市文化財調査報告書 第168集
市道古志大野線道路改良事業に伴う発掘調査報告書 2

二部 遺跡

平成27(2015)年8月

発行 烏根県松江市教育委員会
公益財團法人松江市スポーツ振興財團

印刷 ㈱谷口印刷
鳥根県松江市東長江町902-59
